

I 研究・調査活動 —研究推進センター—

[概要]

共同研究に関しては、6か年のプロジェクトである「人間文化研究機構基幹研究プロジェクト」(5課題)、「人間文化研究機構共創先導プロジェクト」(1課題)、3か年のプロジェクトである「基幹研究」(2課題4プランチ)及び「基盤研究」10課題(新規3課題、継続7課題)、単年度のプロジェクトである共同利用型共同研究6課題を推進した。

人間文化研究機構基幹研究プロジェクトは、人間文化の新たな価値体系の創出に向けて、国内外の研究機関や地域社会等と組織的に連携して現代的諸課題の解明を目指すプロジェクトであり、その研究のスタイルにより「機関拠点型」、「広領域連携型」及び「ネットワーク型」の3つのタイプがある。いずれも2022年度より開始した。歴博では「機関拠点型」として「日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究」、「広領域連携型」として「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発」、「同位体による年代・古気候・交流史研究」、「延喜式のデジタル技術による汎用化」、「ネットワーク型」として「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」を実施した。また同機構共創先導プロジェクトは機構内各機関及び国内外の大学等研究機関が連携して、研究資源や研究成果の共有化及び地域との共創・協働等を通して社会に貢献するプロジェクトであり、やはり今年度より開始した。共創促進研究として「外交と日本コレクション—19世紀在外日本資料の世界史的文脈による研究と現地およびオンライン空間における活用」を推進する。

当館の基幹研究は、「水と人間の日本列島史」(2019～2022年度)と「環境や交流からみた日本歴史の動的研究」(2022年度～)の2課題を推進した。前者は今年度をもって残っていた1プランチ「水をめぐる生活世界—実用と信仰の視点から—」が終了することとなり、後者は「交流・環境からみたオホーツク文化・擦文文化、アイヌ文化—その成立・展開過程—」等3プランチがいずれも今年度より新たに開始した。

基盤研究は課題設定型・館蔵資料型・歴博研究映像の3つの型よりなる。

課題設定型は、「近代東アジアにおけるエゴ・ドキュメントの学際的・国際的研究」(明治学院大学・田中祐介)「中世日本の地域社会における都市の存立と機能の研究」(以上新規課題)「日本植物文化史の分野横断的な検証と展示手法の再構築」「家内における死者祭祀・祭具の現在とその歴史的検討：変容するモノ・家族・社会」(ものづくり大学・土居浩)「定期市からみた地域の生活文化の歴史と多様性に関する研究」(千葉県立中央博物館・島立理子)「秦漢時代の文字使用をめぐる学際的研究」(東京学芸大学・下田誠)「映像による民俗誌の叙述に関する総合的検討—制作とアーカイブスの実践的方法論の検討—」(京都産業大学・村上忠喜)(以上継続課題)の7課題である。

館蔵資料型は、「『広橋家旧蔵記録文書典籍類』を素材とする中世公家の家蔵史料群に関する研究」(学習院大学・家永遵嗣)「高度情報化による古代中世の寺院および荘園の総合的研究—額田寺伽藍並条里図と栄山寺寺領文書を中心に—」(早稲田大学・下村周太郎)(いずれも継続課題)の2課題である。歴博研究映像は「歴博研究映像の総合的活用の方法論の構築—沖縄地域の映像を中心に—」(多摩美術大学・春日聡)の1課題を今年度新たに開始した。

また、若手研究者育成への取り組みとして、単年度で行う共同利用型共同研究(館蔵資料利用型、分析機器・設備利用型)の公募を行い、今年度は6件を採択した。本プロジェクトの成果が研究論文や学会発表に活かされていることを期待したい。

以上の他、「機関拠点型」の人間文化研究機構基幹研究プロジェクトでは、メタ資料学研究センターを中心に、全国の大学・研究機関等と連携しつつ共同研究を推進している。今年度も、奨励研究の外部公募(2件)を行った。

各共同研究の成果は、『国立歴史民俗博物館研究報告(特集号)』として継続的に刊行されてきているが、本年度は、235号から240号までの6冊(うち、240号は通常号)を刊行した。

一方で、研究・調査活動の原資である運営費交付金が削減されていく状況において、外部資金を導入しつつ研究の活性化を進めることは本館が取り組むべき課題であるが、科研費申請にあたっての支援経費の助成等の取組みを継続した。

海外の大学等研究機関との国際交流事業は、国際企画室のもと、第3期中期目標・中期計画期間においてその強化を図ることが課題となっているが、本年度は、学術交流協定に基づき、6件の国際交流事業を実施し、国立中央博物館(韓国)との「加耶—古代東アジアを生きた、ある王国の歴史—」(韓国・国立中央博物館、釜山博物館で2019年から2020年に開催、日本・国立歴史民俗博物館、日本・九州国立博物館で2022年度開催、韓国・国立金海博物館で開催予定)の両国での開催に際して、相互に惜しめない協力を行い、研究成果の発信を行った。ま

た日本関連在外資料調査研究では、ダラム大学東洋博物館にて「Monogatari: the art of storytelling in Japanese woodblock prints」展（2022年1月28日～5月15日）の開催による研究成果の発信を行った。ルーヴェン・カトリック大学とは協定事業として、大学附属図書館での日本展示「Japan's Book Donation to the University of Louvain」（2022年10月28日～2023年1月15日）について、本館資料の貸出と展示協力を行った。その他、ダラム大学東洋博物館、ナショナルトラストスコットランド、スコットランド国立博物館、グラスゴー博物館機構、ケンブリッジ大学（以上、英国）、大韓文化財研究院、国立中央博物館、慶北大学校（以上、韓国）、ブランデンシュタイン家（ドイツ）、バンドン工科大学（インドネシア）等との連携協力による共同調査、共同研究、教育事業を推進した。また新たにケンブリッジ大学アジア・中東学部日本学科、韓国国立民俗博物館と学術交流協定を結んだ。

このほか、外国人招へい研究者4名（韓国3名、イギリス1名）を受け入れ、共同研究や総合展示等の調査・研究活動を推進するとともに、協定機関との人的ネットワーク構築や共同研究のシーズ発掘を継続した。

研究推進センター長 小倉 慈司